

12年間
共演!

萩本欽一が語る『オールスター家族対抗歌合戦』秘話



番組に家族で出演したことも。自身の作曲した「とんがり帽子」を歌った。左端は長男の正裕氏



欽ちゃんは、この番組で初めて司会を務めた。78歳になった今でも「転機になった番組だね」と僕がしむ

小学生のころ、外で遊んでいると、どこからか「とんがり帽子」(菊田一夫作詞)が聞こえてきてね。そのころは、ラジオを聴いてると、いつも「作曲、古関裕而」って言うてたから、日本の曲は全部古関先生が作っているんだと思ってたよ(笑)。そんな偉大な先生を番組の審査員長に呼んじゃったの? って、最初は恐ろしかったね。

僕が司会をしていた12年間、先生はね、何もしゃべらず、笑って頷くだけ。歌手で作曲家の近江(後郎)先生が話を振るでしょ。そのときもただに「こーって、笑うというか、自然と笑顔が溢れる感じなの。お地藏さんのような、穏やかな方だった(笑)。

いまでも思い出すのは、放送開始から10年たったころ。近江先生が「欽ちゃん、番組の中で座ったことないよね。我々に気を遣うことはない、座ったほうがいいよ」って言うてくれたわけ。すると古関先生、「座りな」と言うように、自分の椅子の横をトントン叩いて「今後座りません」って言った。そのときもにっこり笑ってらした(笑)。

家もほんの数軒先で、奥さんと手を繋いで歩いている姿をよくお見かけしました。たくさん曲を作っているのに、家は普通の一軒家。俗世界にふれたことがない方だよ。だから、あれだけの透き通った曲ができたんだと思います。



浜口氏は現在、フジテレビ専任顧問を務める

裕而は72年から12年間、『オールスター家族対抗歌合戦』(フジテレビ系)に審査員長として出演。お茶の間でも人気者となった。番組のプロデューサー兼ディレクターだった浜口哲夫氏(75)が振り返る。

「僕らが目指したのは、出演家族のヒューマンドキュメンタリー。笑って歌って、楽しく家族のありようを伝える。そのコンセプトをご理解いただいて、出演してくださいってんだと思っています」

訥々とした語りは名物に。「古関先生は、一生懸命お話しになればなるほど、つかつかつたりする。それがまた素敵なんです。にこにこしながら歌を聴いていらして、精いっぱい、歌った家族を褒める。そういうときの古関先生の存在感は、萩本さんとは別の意味で、番組のシンボルでした。戦後日本を復興させ、国民の気持ちをも明るく奮い立たせた大功労者の一人です」

ドラマではどう描かれていくのだろう。

写真提供・古関正裕氏、福島市古関裕而記念館、浜口哲夫氏
写真・木村哲夫(萩本欽一氏)、高田 正(古関正裕氏、齋藤秀隆氏)、Masato Ishizuka(浜口哲夫氏)